

各地方防衛局長  
東海防衛支局長 殿

地方協力局長

防衛施設周辺地域の生活環境等の整備等に係る補助対象財産の処分について（通知）

防衛施設周辺地域の生活環境等の整備等に係る補助金等の交付を受けて取得し、又は効用の増加した財産を当該補助金等の交付の目的に反して使用し、譲渡し、交換し、貸し付け、担保に供し、又は取り壊すこと等を行うに当たっては、「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」（昭和30年法律第179号）第2条第3項に規定する補助事業者等にあつては、同法第22条に規定する防衛大臣（同法第26条第1項により、地方防衛局長又は東海防衛支局長（以下「地方防衛局長等」という。）に事務が委任されている場合は地方防衛局長等。以下同じ。）の承認が、同法第2条第6項に規定する間接補助事業者等にあつては、同法第7条第3項の規定により付した条件に基づく防衛大臣又は地方防衛局長等の承認が、それぞれ必要である。

これらの承認について、近年における急速な少子高齢化の進展、産業構造の変化等の社会経済情勢の変化に対応するとともに、既存ストックを効率的に活用した地域活性化を図るため、承認手続等の一層の弾力化及び明確化を図ることとし、今般、「防衛施設周辺地域の生活環境等の整備等に係る補助対象財産処分承認基準」について、別添のとおり定められたので通知する。

各地方防衛局長等におかれては、関係地方公共団体等に対し、この承認基準について十分周知を図るとともに、情報提供を確実に実施されたい。

なお、「補助事業等により取得し、又は効用の増加した財産の処分について」（施本施第200号(CFP)。平成13年3月16日）は廃止する。

添付書類：防衛施設周辺地域の生活環境等の整備等に係る補助対象財産処分承認基準

## 防衛施設周辺地域の生活環境等の整備等に係る補助対象財産処分承認基準

### 第1 趣旨

「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」(昭和30年法律第179号。以下「適正化法」という。)第22条の規定に基づく財産処分(補助金等の交付を受けて取得し、又は効用の増加した政令で定める財産(以下「補助対象財産」という。)を補助金等の交付の目的に反して使用し、譲渡し、交換し、貸し付け、担保に供し、又は取り壊すこと等をいう。以下同じ。)の承認については、近年における急速な少子高齢化の進展、産業構造の変化等の社会経済情勢の変化に対応するとともに、既存ストックを効率的に活用した地域活性化を図るため、防衛施設周辺地域の生活環境等の整備等(以下「周辺対策事業等」という。)に係る補助対象財産の承認基準を定め、承認手続等の一層の弾力化及び明確化を図ることとされたものである。

なお、補助対象財産の用途を変更する財産処分については、当該財産処分が行われる地域において、同種の社会資源が既に充足していることが前提であり、補助事業等を行う地方公共団体の判断を確認の上、その判断を尊重し、対応することとする。

### 第2 承認の手続

#### 1 申請手続の原則

補助事業者等が財産処分を行う場合には、防衛大臣(適正化法第26条第1項により事務委任されている場合は地方防衛局長又は東海防衛支局長。以下「防衛大臣等」という。)に別紙様式第1の財産処分承認申請書を提出することにより、申請手続を行う。

間接補助事業者等が財産処分を行う場合には、当該間接補助事業に係る補助事業者等に対し財産処分の承認申請を行い、申請を受けた補助事業者等は、防衛大臣等に別紙様式第1の財産処分承認申請書を提出することにより、申請手続を行う。

#### (注1) 財産処分の種類

転 用： 補助対象財産の所有者の変更を伴わない目的外使用。

譲 渡： 補助対象財産の所有者の変更。

交 換： 補助対象財産と他人の所有する他の財産との交換。なお、設備の故障時の業者による引取りは、交換ではなく廃棄に当たる。

貸 付： 補助対象財産の所有者の変更を伴わない使用者の変更。

担 保： 補助対象財産に対する抵当権の設定。

取壊し： 補助対象財産(施設)の使用を止め、取り壊すこと。

廃 棄： 補助対象財産(設備)の使用を止め、廃棄処分をすること。

(注2) 一時使用の場合

施設の業務時間外の時間帯や休日を利用し、本来の事業に支障を及ぼさない範囲で一時的に他の用途に使用する場合は、財産処分に該当せず、手続は不要である。

(注3) 承認後の変更

承認を得た後、当該承認に係る処分内容と異なる処分を行う場合又は当該財産処分の承認に付された条件を満たすことができなくなった場合には、改めて手続が必要である。

2 申請手続の特例（包括承認事項）

次に掲げる財産処分（以下「包括承認事項」という。）であって別紙様式第2により防衛大臣等への報告があったものについては、上記1の規定にかかわらず、防衛大臣等の承認があったものとして取り扱うものとする。ただし、この報告において、記載事項の不備など必要な要件が具備されていない場合には、この限りではない。

- (1) 地方公共団体が、当該周辺対策事業等に係る社会資源が当該地域において充足しているとの判断の下に行う次の財産処分（有償譲渡及び有償貸付を除く。）
  - ① 経過年数（補助目的のために事業を実施した年数をいう。以下同じ。）が10年以上である施設又は設備（以下「施設等」という。）について行う財産処分
  - ② 経過年数が10年未満である施設等について行う財産処分であって、市町村の合併の特例に関する法律（昭和40年法律第6号）に基づく市町村建設計画又は市町村の合併の特例等に関する法律（平成16年法律第59号）に基づく合併市町村基本計画に基づいて行われるもの
- (2) 災害若しくは火災により使用できなくなった施設等又は立地上若しくは構造上危険な状態にある施設等の取壊し又は廃棄（以下「取壊し等」という。）
- (3) 新たに補助金等の交付を受けずに代替の施設等を復元した上で行う財産処分
- (4) 地方公共団体以外の者が行う経過年数10年以上である施設等の転用であって、周辺対策事業等の交付の対象となる施設その他の公共用の施設への転用

(注) 地域再生法に基づくみなし承認の場合

地域再生法（平成17年法律第24号）第23条の規定により防衛大臣等の承認を受けたものとみなされた財産処分については、この承認基準に定める手続を要しない。

第3 国庫納付に関する承認の基準

1 地方公共団体が行う財産処分

- (1) 国庫納付に関する条件を付さずに承認する場合

地方公共団体が行う次の財産処分については、国庫納付に関する条件（財産処分に係る納付金（以下「財産処分納付金」という。）を国庫に納付する旨の条件をいう。以下同じ。）を付さずに承認するものとする。

- ① 包括承認事項（第2の2の（1）から（3）までの場合）
  - ② 経過年数が10年未満である施設等に係る財産処分であって、次に掲げるもの
    - ア 市町村合併、地域再生等の施策に伴い、当該地方公共団体が当該周辺対策事業等に係る社会資源が当該地域において充足しているとの判断の下に行う財産処分であって、防衛大臣等が適当であると個別に認めるもの（有償譲渡及び有償貸付を除く。）
    - イ 同一事業を10年以上継続する場合の無償譲渡又は無償貸付
    - ウ 道路の拡張整備等の設置者の責に帰さない事情等によるやむを得ない取壊し等（相当の補償を得ているものの、代替施設を整備しない場合を除く。）
  - ③ その他条件を付さないことが適当であると防衛大臣等が個別に認めるもの
- (2) 国庫納付に関する条件を付して承認する場合  
上記以外の転用、譲渡、貸付、交換及び取壊し等については、国庫納付に関する条件を付して承認するものとする。

## 2 地方公共団体以外の者が行う財産処分

- (1) 国庫納付に関する条件を付さずに承認する場合  
地方公共団体以外の者が行う次の財産処分については、国庫納付に関する条件を付さずに承認するものとする。（②及び③については、当該周辺対策事業等に係る社会資源が当該地域において充足していることを前提とする。）
  - ① 包括承認事項（第2の2の（2）から（4）までの場合）
  - ② 経過年数が10年以上である施設等に係る財産処分であって、次に掲げるもの
    - ア 無償譲渡又は無償貸付の後に引き続き他の公共用の施設として使用する場  
合
    - イ 交換により得た施設等において周辺対策事業等を行う場合
    - ウ 国又は地方公共団体への無償譲渡又は無償貸付
  - ③ 経過年数が10年未満である施設等に係る財産処分であって、上記②アからウまでに該当するもののうち、市町村合併、地域再生等の施策に伴うものであ  
って、防衛大臣等が適当であると個別に認めるもの
  - ④ 同一事業を10年以上継続する場合の無償譲渡又は無償貸付
  - ⑤ 道路の拡張整備等の設置者の責に帰さない事情等によるやむを得ない取壊し  
等（相当の補償を得ているものの、代替施設を整備しない場合を除く。）
  - ⑥ その他条件を付さないことが適当であると防衛大臣等が個別に認めるもの
- (2) 国庫納付に関する条件を付して承認する場合  
上記以外の転用、譲渡、貸付、交換及び取壊し等については、国庫納付に関する条件を付して承認するものとする。

(3) 再処分に関する条件を付す場合

① 再処分に関する条件を付す場合

上記(1)のうち、②、③、④及び⑥の場合（取壊し等の場合及び国又は地方公共団体への無償譲渡の場合を除く。）には、再処分に関する条件（当初の財産処分の承認後10年（残りの処分制限期間が10年未満である場合には、当該期間）を経過するまでの間は、防衛大臣等の承認を受けないで当該施設等（交換の場合には、交換により得た施設等）の処分を行ってはならない旨の条件をいう。以下同じ。）を付すものとする。

② 再処分に関する条件を付された者の財産処分

再処分に関する条件を付された者が行う財産処分の承認については、この承認基準に基づき取り扱う。

この場合、補助目的のために使用した期間と財産処分後に使用した期間とを通算した期間を経過年数とみなす。

なお、譲渡により所有者に変更があった場合の申請手続については、財産処分後の所有者を、財産処分前の所有者とみなして取り扱う。

3 担保に供する処分（抵当権の設定）

次に掲げる担保に供する処分については、抵当権が実行に移される際に財産処分納付金を国庫に納付させることを条件として承認するものとする。

(1) 補助対象財産を取得する際に、当該補助対象財産を取得するために行われるもの

(2) 補助事業者等の資金繰りのため、抵当権の設定を認めなければ事業の継続ができないと認められるもので、返済の見込みがあるもの

(注) 土地の財産処分の取扱い

原則として、当該土地に整備された施設の財産処分の取扱いと同様とする。

第4 財産処分納付金の額

1 有償譲渡又は有償貸付

(1) 地方公共団体の場合

① 譲渡額等を基礎として算定する場合

ア 財産処分納付金額

地方公共団体が行う次に掲げる有償譲渡又は有償貸付に係る財産処分納付金額は、譲渡額又は貸付額（貸付期間にわたる貸付額の合計の予定額。以下同じ。）に、総事業費（補助基準額を超える設置者負担分を含む。以下同じ。）に対する国庫補助額の割合を乗じて得た額とする。

(ア) 当該周辺対策事業等に係る社会資源が当該地域において充足しているとの地方公共団体の判断の下に行う経過年数が10年以上である施設等の有償譲渡又は有償貸付

(イ) 当該周辺対策事業等に係る社会資源が当該地域において充足しているとの地方公共団体の判断の下に行う経過年数が10年未満である施設等の有償譲渡又は有償貸付であって、市町村合併、地域再生等の施策に伴い当該財産処分を行うことが適当であると防衛大臣等が個別に認める場合

(ウ) 同一事業を継続する場合の有償譲渡又は有償貸付

イ 上限額

残存年数納付金額（施設等にあつては、処分する施設等に係る国庫補助額に、処分制限期間に対する残存年数（処分制限期間から経過年数を差し引いた年数をいう。以下同じ。）又は貸付年数（処分制限期間内の期間に限る。以下同じ。）の割合を乗じて得た額を、土地等にあつては、国庫補助額をいう。以下同じ。）を上限額とする。

② 残存年数納付金額とする場合

地方公共団体が行う上記①以外の有償譲渡又は有償貸付に係る財産処分納付金額は、残存年数納付金額とする。

(2) 地方公共団体以外の者の場合

① 譲渡額等を基礎として算定する場合

ア 財産処分納付金額

地方公共団体以外の者が行う次に掲げる有償譲渡又は有償貸付に係る財産処分納付金額は、譲渡額又は貸付額（評価額（不動産鑑定額又は残存簿価（減価償却後の額）をいう。以下同じ。）に比して著しく低価である場合には、評価額。）に、総事業費に対する国庫補助額の割合を乗じて得た額とする。

(ア) 当該周辺対策事業等に係る社会資源が当該地域において充足している場合に行う経過年数が10年以上である施設等の有償譲渡又は有償貸付であつて、引き続き公共用の施設として使用する場合

(イ) 当該周辺対策事業等に係る社会資源が当該地域において充足している場合に行う経過年数が10年未満である施設等の有償譲渡又は有償貸付であつて、引き続き周辺対策事業等を行うもののうち、市町村合併、地域再生等の施策に伴い当該財産処分を行うことが適当であると防衛大臣等が個別に認める場合

(ウ) 同一事業を10年以上継続する場合の有償譲渡又は有償貸付

イ 上限額

残存年数納付金額を上限額とする。

② 残存年数納付金額とする場合

地方公共団体以外の者が行う上記①以外の有償譲渡又は有償貸付に係る財産処分納付金額は、残存年数納付金額とする。

2 転用、無償譲渡、無償貸付、交換又は取壊し等

国庫納付に関する条件を付された転用、無償譲渡、無償貸付、交換又は取壊し等の場合の財産処分納付金額は、残存年数納付金額とする。

### 3 担保に供する処分

抵当権が実行に移された際に納付すべき財産処分納付金の額は、有償譲渡の場合と同じ額とする（抵当権が実行に移された際に納付）。

別紙様式第1

文 書 番 号  
平成 年 月 日

〔防 衛 大 臣〕  
〔地方防衛局長〕 殿  
〔東海防衛支局長〕

補助事業者 住 所  
氏 名 印

施設周辺整備助成補助金（※1）により取得した学習等供用施設（※1）  
に係る財産処分について

標記について、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第  
179号）第22条の規定に基づき（※2）、次の財産処分について承認を求める。



- 1 財産処分の種類 (該当するものに○)  
 ( 転用 有償譲渡 有償貸付 無償譲渡 無償貸付 交換 抵当権の設定 取壊し又は廃棄 )

2 財産処分の概要

①補助事業者名		②間接補助事業者名 (間接補助の場合のみ)		③施設名		④所在地	
⑤施設(設備)種別		⑥建物構造		⑦処分に係る建物延面積		⑧建物延面積の全体	
		造		m <sup>2</sup>		m <sup>2</sup>	
⑨国庫補助金相当額 (処分に係る部分の額)	⑩国庫補助額全体	⑪総事業費	⑫国庫補助年度	⑬処分制限期間	⑭経過年数		
円	円	円	年度	年	年		
⑮処 分 の 内 容					⑯処分予定年月日		
⑰譲渡予定額 (譲渡の場合)	⑱評 価 額		⑲評価額の算出方法(いずれかに○)				
			定率法・定額法・不動産鑑定額				

3 財産処分の経緯及び理由

--

4 承認条件としての納付金 (有・無)

- ・無の場合 (次の承認基準の第3(国庫納付に関する承認の基準)の該当項目に○)
  - 1 地方公共団体 (1) ( ②ア ②イ ②ウ ③ )
  - 2 地方公共団体以外の者 (1) ( ②ア ②イ ②ウ ③ ④ ⑤ ⑥ )
- ・有の場合 (次の承認基準の第4の1(有償譲渡又は有償貸付)の該当項目に○)
  - (1) 地方公共団体 ① ( ア(ア) ア(イ) ア(ウ) ) ②
  - (2) 地方公共団体以外の者 ① ( ア(ア) ア(イ) ア(ウ) ) ②

5 添付資料

- ・対象施設の図面(国庫補助対象部分、面積を明記したもの)及び写真
- ・国庫補助金交付決定通知書及び確定通知書の写し(保管されていない場合は交付額を確認できる決算書でも可)
- ・その他参考となる資料

(記入要領)

※1 「施設周辺整備助成補助金」及び「学習等供用施設」の標記は、補助金等の名称及び補助対象施設(設備)名にあわせること。

※2 間接補助事業に係る財産処分の場合は、「第7条第3項の規定により付した条件に基づき」と記載すること

1 財産処分の種類 いずれか該当するものを○で囲むこと。

2 財産処分の概要

(1) 「⑤施設(設備)種別」欄には、国庫補助金交付額確定時の補助対象施設(設備)名又は補助事業に係る施設(設備)名を記載すること。

(2) 「⑥建物構造」欄には、鉄骨鉄筋コンクリート、鉄筋コンクリート、ブロック造、鉄骨造、れんが造、石造等建物構造について記入すること。

(3) 「⑮処分の内容」欄には、次の例のように、財産処分の内容を簡潔に記載すること。

例: ○○施設を□□施設に転用。

○○施設の一部を転用し、○○施設と□□施設に変更。

○○施設の余裕部分(○○室)を□□事業を行う場所に転用。

社会福祉法人○○に譲渡し、同一事業で継続。

○○設備が故障し修理不能となったため廃棄し、代替設備を自己財源で購入。

(4) 「⑱評価額」欄には、不動産鑑定額又は残存簿価(減価償却後の額)を記載し、「⑱評価額の算出方法」欄では、当該評価額の算出方法等(定率法、定額法又は不動産鑑定額)を○で囲むこと。

3 財産処分の経緯及び理由

財産処分をするに至った経緯と理由を記載すること。

なお、地方公共団体が補助事業者であって財産処分に伴い用途を変更する場合には、処分対象財産に係る更なる需要増が見込めないことなど、地域における関係施策の推進に支障がない旨を確認し、その旨を記載すること。

4 承認条件としての納付金

財産処分を承認するに当たり、納付金を国庫に納付する旨の条件が付される場合には「有」を、条件が付されない場合には「無」を○で囲むこと。

その上で、承認を求める財産処分が該当する承認基準中の該当項目の番号を○で囲むこと。

5 添付書類

(1) 対象施設の全部を譲渡又は貸付する場合には、対象施設の図面や写真は添付しなくても構わない。

(2) 間接補助事業については、施設設置者(間接補助事業者)からの財産処分承認申請書の写しを添付すること。

(3) 補助施設建設工事完了の検査済証、備品納品書、補助施設の事業廃止を証明する資料など、経過期間の確認ができる資料の写しを必ず添付すること。

(4) その他参考となる資料については、適宜当該財産処分の内容や理由を補足する資料を添付すること。

文 書 番 号  
平成 年 月 日

〔防 衛 大 臣〕  
〔地方防衛局長〕 殿  
〔東海防衛支局長〕

補助事業者 住 所  
氏 名 印

施設周辺整備助成補助金（※1）により取得した学習等供用施設（※1）  
に係る財産処分の報告について

標記について、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和30年法律第  
179号）第22条の規定に基づき（※2）、次の財産処分について報告する。

- 1 財産処分の種類 (該当するものに○)  
( 転用 無償譲渡 無償貸付 交換 取壊し又は廃棄 )

2 財産処分の概要

①補助事業者名		②間接補助事業者名 (間接補助の場合のみ)		③施設名		④所在地	
⑤施設(設備)種別		⑥建物構造		⑦処分に係る建物延面積		⑧建物延面積の全体	
		造		m <sup>2</sup>		m <sup>2</sup>	
⑨国庫補助金相当額 (処分に係る部分の額)	⑩国庫補助額全体	⑪総事業費	⑫国庫補助年度	⑬処分制限期間	⑭経過年数		
円	円	円	年度	年	年		
⑮処 分 の 内 容						⑯処分予定年月日	

3 財産処分の経緯及び理由

--

4 財産処分承認基準通知の第2の2の該当項目(番号を○で囲む。)

- ・ 地方公共団体 (1) ( ① ② ) (2) (3)
- ・ 地方公共団体以外の者 (2) (3) (4)

5 添付資料

- ・ 対象施設の図面(国庫補助対象部分、面積を明記したもの)及び写真
- ・ 国庫補助金交付決定通知書及び確定通知書の写し(保管されていない場合は交付額を確認できる決算書でも可)
- ・ その他参考となる資料

(記入要領)

※1 「施設周辺整備助成補助金」及び「学習等供用施設」の標記は、補助金等の名称及び補助対象施設(設備)名にあわせること。

※2 間接補助事業に係る財産処分の場合は、「第7条第3項の規定により付した条件に基づき」と記載すること

1 財産処分の種類 いずれか該当するものを○で囲むこと。

2 財産処分の概要

(1) 「⑤施設(設備)種別」欄には、国庫補助金交付額確定時の補助対象施設(設備)名又は補助事業に係る施設(設備)名を記載すること。

(2) 「⑥建物構造」欄には、鉄骨鉄筋コンクリート、鉄筋コンクリート、ブロック造、鉄骨造、れんが造、石造等建物構造について記入すること。

(3) 「⑩処分の内容」欄には、次の例のように、財産処分の内容を簡潔に記載すること。

例: ○○施設を□□施設に転用。

○○施設の一部を転用し、○○施設と□□施設に変更。

○○施設の余裕部分(○○室)を□□事業を行う場所に転用。

社会福祉法人○○に譲渡し、同一事業で継続。

○○設備が故障し修理不能となったため廃棄し、代替設備を自己財源で購入。

(4) 「⑪評価額」欄には、不動産鑑定額又は残存簿価(減価償却後の額)を記載し、「⑪評価額の算出方法」欄では、当該評価額の算出方法等(定率法、定額法又は不動産鑑定額)を○で囲むこと。

3 財産処分の経緯及び理由

財産処分をするに至った経緯と理由を記載すること。

なお、地方公共団体が補助事業者であって財産処分に伴い用途を変更する場合には、処分対象財産に係る更なる需要増が見込めないことなど、地域における関係施策の推進に支障がない旨を確認し、その旨を記載すること。

4 財産処分承認基準通知の第2の2の該当項目

承認を求める財産処分が該当する承認基準中の該当項目の番号を○で囲むこと。

5 添付書類

(1) 対象施設の全部を譲渡又は貸付する場合には、対象施設の図面や写真は添付しなくても構わない。

(2) 間接補助事業については、施設設置者(間接補助事業者)からの財産処分承認申請書の写しを添付すること。

(3) 補助施設建設工事完了の検査済証、備品納品書、補助施設の事業廃止を証明する資料など、経過期間の確認ができる資料の写しを必ず添付すること。

(4) その他参考となる資料については、適宜当該財産処分の内容や理由を補足する資料を添付すること。